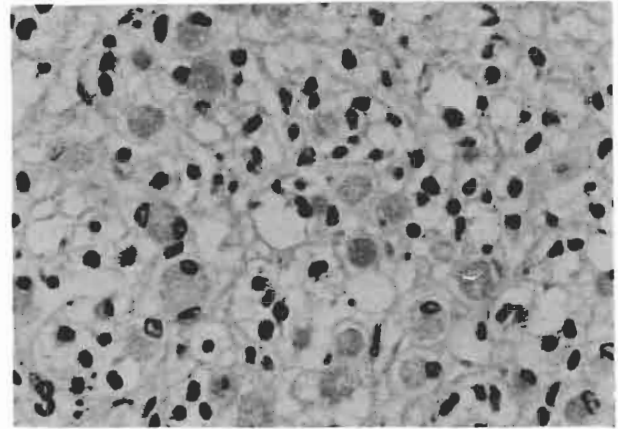
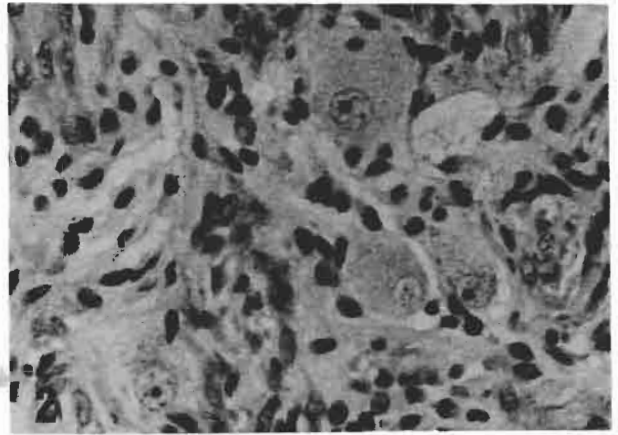
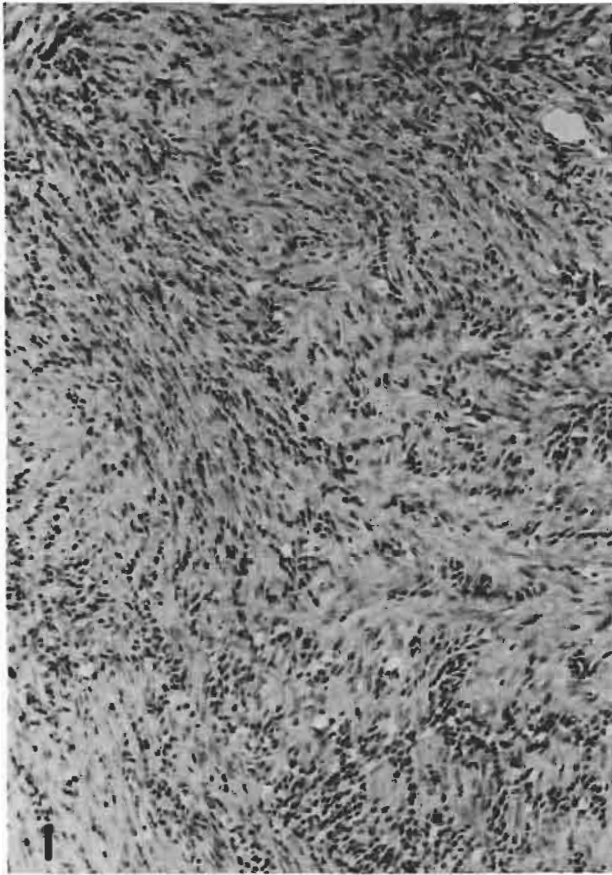


# 犬の下顎歯肉部腫瘍

日本獣医畜産大学獣医病理学教室出題 第29回獣医病理学研修会標本No.509



**動物：**犬，トイプードル，雌，12歳。

**臨床的事項：**1988年4月，下顎右側歯肉部の2mm大の乳頭状腫瘍を切除。約1ヵ月後，下顎全域に再発が認められ，同時に左頸部の腫脹も認められた。同6月，摘出可能な下顎軟部組織を切除したが，腫瘍は乳白色限界不明瞭で全てを摘出しきれず，同8月，再び増殖した腫瘍を下顎骨とともに切除摘出した。この時，限界明瞭な左頸部腫瘍及び浅頸リンパ節を同時に摘出した。その後も腫瘍の増殖は止まらず，同10月，安楽死させた。

**剖検所見：**剖検時には，肺の全葉にわたる大小の乳白色転移性腫瘍を認めた。また，右頸部腫瘍では頸部迷走神経の巻き込みも認められた。

**組織学的所見：**腫瘍は大部分，粘膜下に増殖した紡錘形細胞よりなり，神経鞘腫あるいは神経線維腫の像を呈する部も認められた（写真1，HE）。これらの腫瘍細胞では，PAP法により，S-100蛋白 $\alpha$ 鎖及び一部でGFAPの陽性像が確認された。また，紡錘形腫瘍細胞束間に存在する，核/細胞質比の高い未分化小型細胞では，PAP法により，GFAP及び一部でビメンチンが陽性を呈した。これらの腫瘍細胞の配列に混じり，部位によっては衛星細胞を伴ったガングリオン細胞の出現も認めら

れた（写真2，HE）。すなわち，これら腫瘍性の紡錘形細胞，未分化小型細胞及びガングリオン細胞について，その由来は神経外胚葉性であると考えられた。

しかし一方では，好酸性類円形～不定形細胞の胞巣状出現も認められた（写真3，HE）。これらの腫瘍細胞では，PAP法により，ミオグロビン及びデスミンが陽性を呈し，一部のものについては電顕的にZ帯の明瞭なミオフィラメントが確認された。すなわち，これら好酸性類円形～不定形細胞群については，横紋筋肉腫の像と考えられ，その由来は間葉系であると考えられた。

**病理組織学的診断：**以上より，本腫瘍は同一腫瘍組織内で神経鞘腫及び神経線維腫，primitive neuroectodermal tumor，神経節細胞腫及び横紋筋肉腫が認められたこと，各種中間径フィラメント保有状況から全体的に未分化な性格を示すことなどから，神経冠細胞由来とされる悪性外胚葉性間葉腫（malignant ectomesenchymoma）と診断した。現在までにヒトで16例の報告があるのみの本腫瘍は，鳥類で確認されている多分化能を有する神経冠細胞が哺乳類でも存在することを示すものと考えられている。